

平成23年3月31日現在

機関番号：12501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2008年度～2010年度

課題番号：20890041

研究課題名（和文）不妊治療によって妊娠し早産した母親のわが子についての認識の変化(仮)

研究課題名（英文） Mothers' recognition of their premature children following infertility treatment

研究代表者

三瀬 尚子 (NAOKO MISE)

千葉大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：40513940

研究成果の概要（和文）：

研究目的は早産した母親のNICU入院中および退院後のわが子についての認識と、その変化を明らかにし、不妊治療後妊娠し早産した母親のわが子についての認識と母子関係作りを促す看護援助について考察すること。母親4名に半構成的面接を行い質的に分析。

早産した母親は入院中だけでなく退院後も児のはかなさを持ち続け、発達予後への不安の一方、わが子と一緒に暮らしや入院中のストレスからの解放に嬉しさを感じ、一緒に過ごすことでわが子の成長を実感、さらに母親としての自分自身を実感することが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The objective of the present study was to elucidate the recognition of premature infants among their mothers and changes in this recognition during hospitalization in the NICU and after discharge. This study investigated the recognition of children among mothers who had become pregnant following fertility treatment and given birth prematurely. Furthermore, this study examined nursing assistance that promotes the development of the mother-child relationship. Semi-structured interviews were conducted on four mothers of premature infants, and interview contents were qualitatively analyzed.

Mothers of premature infants continued to have concerns about the fragility and developmental prognosis of their children following discharge. At the same time, mothers felt happy about the fact that they were able to live with their children as well as the release from the stress they had been experiencing during hospitalization, and the opportunity to live together enabled them to realize the child's growth. In addition, mothers gained the recognition of themselves as mothers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	570,000	171,000	741,000
2009年度	66,570	19,971	86,541
2010年度	243,430	73,029	316,459
年度			
年度			
総計	880,000	264,000	1,144,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：生涯発達看護学

キーワード：早産児 育児 NICU 不妊治療

1. 研究開始当初の背景

日本において高度生殖医療 (Assisted Reproductive Technology: 以下 ART とする) により誕生した子どもは年々増加し、2005年には 19,112 人を数えるようになった。体外受精-胚移植 (In Vitro Fertilization and Embryo Transfer: 以下 IVF-ET とする) による妊娠の早産率は 28.2%、自然妊娠での早産率が約 5% であり、IVF-ET 群の早産率が高率であることが示されている。概算によると、現在では早産児の約 12 人に 1 人が体外受精・胚移植による妊娠であることが考えられる。

早産児の場合、出生直後から新生児集中治療室 (neonatal intensive care unit: 以下 NICU とする) に入院することが多く、母子分離やわが子の外観に対してショックを受ける母親も多い<sup>1)</sup>。また、近年の医療技術、周産期医療の発展に伴い、重症児でも高い割合で救命できるようになったが、その後の脳性麻痺や小学校就学後も運動面や学習面でさまざまな問題を有しており、退院後も各年齢に応じたサポートが必要であることが報告されている<sup>2)</sup>。早産した家族への看護のかかわりとして、看護師と家族が互いに理解、信頼し合える関係を基盤に、子どもが入院するという心理的な危機的状況を克服し家族が発展することを支える Family centered care が注目されている。そして早産児の母親がわが子との関係を育むためには、母親は複雑な心境を理解、共感される必要があると考えられている。

特に不妊治療によって妊娠し早産した母親は、妊娠中は妊娠継続や出産自体を目標として気持ちを集中させており<sup>3)</sup>、出産後の母親像や母親役割のイメージ化が十分になされていないことや、出産後にわが子に対して貴重児であるという特徴的な認識をすることも報告されている<sup>4)5)</sup>。さらに、産褥期に抑うつ傾向や、子どもに対してアンビバレントな感情を抱いていること、育児方法に不安を持つ傾向がみられた<sup>6)</sup>。このように正期産であってもわが子について特徴的な認識がある不妊治療後の母親が待望の妊娠を早産した

場合には、早産と不妊治療のそれぞれの受け止めだけでなく、さらに複雑な受け止めをしていることが考えられる。本研究者は、早産のため子どもが NICU に入院となった母親 13 名に対して、早産後早期に半構成的面接法、質問紙調査法、参加観察法によって調査を行った。その結果、自然に妊娠し早産した母親と不妊治療によって妊娠し早産した母親の、妊娠・出産の受け止めとわが子についての認識には以下のような意味内容に違いが認められた。

不妊治療後の妊娠で早産した母親の妊娠・出産の受け止めは、妊娠継続への執着、想像とのギャップ、早産への諦め、挫折や自責感を抱く否定的なものだけでなく、待望の出産を成し遂げた肯定的なものもあり、多様で複雑な受け止めが認められた。そして、不妊治療後の妊娠で早産した母親のわが子についての認識は、出産の実感にもかかわらずわが子を実感できない矛盾、母親としての理想を追求するがゆえわが子の現実を受け入れられないという特徴が認められた。以上のように、不妊治療によって妊娠し早産した母親は、早産後早期には早産児であるわが子に対して、自然妊娠の母親とは異なる特徴的な認識をしていることが明らかとなった。

以上のように、不妊治療によって妊娠し早産する母親は増加しており、特有の問題を持つことは明らかにされているものの、妊娠期から育児を行う時期までのフォローアップシステムは確立されていない。また、わが子についての認識の変化を明らかにすることで、母親が早産した傷つきから立ち直る過程を経て、NICU 入院中から退院後における子どもへの愛着や、関係作り、育児行動への移行を促進することができると考える。したがって、不妊治療によって妊娠し早産した母親のわが子についての認識の変化を明らかにすることは、意義があると思われる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、早産した母親の、わが子が NICU 入院中および退院後のわが子についての認識と、認識の変化を明らかにし、不妊

治療によって妊娠し早産した母親のわが子についての認識と母親と子どもの関係作りを促す看護援助について考察することである。

### 3. 研究の方法

#### 1) 研究対象

早産（在胎 22 週以降、37 週未満の出産）した母親で、A 県内の総合病院の NICU にわが子が入院もしくは NICU 退院後の 1 か月健診を受診した母親。

#### 2) データ収集・分析

2009 年の 2 ヶ月間に、母親のわが子についての認識については半構成的面接、基礎情報（人口学的・産科的情報など）については記録調査法にてデータを得た。わが子についての認識は、母親のわが子の様子の捉え、わが子に対する感情、わが子についての思いや考えについて調査した。得られたデータを NICU 入院中と退院後に分け質的帰納的に分析した。

#### 3) 倫理的配慮

研究対象者に対し、研究への自由参加の意思と途中辞退の権利の保証、プライバシーの保護等について十分な説明を口頭と文書により行った。尚、本研究は研究者の所属する研究科および調査協力施設の倫理委員会の承認を受けて実施した。

### 4. 研究成果

#### 1) 結果

研究対象者は、わが子が NICU 入院中の母親 2 名、退院後の母親 2 名となった。早産児の在胎週数は 25 週から 34 週（平均 28.8 週）。全員が保育器収容され、そのうち人工呼吸管理が 3 名だった。

入院中のわが子についての認識として 5 カテゴリーが抽出された。【自分が出産した子どもという実感が湧かない】、【専門家でないと世話できない】は、出産後も子どもと離れていることから自分の子どもである実感が湧かず、専門知識のない自分が世話をするとわが子に悪い影響があるという認識であった。【成長発達について期待し、今後の障害について不安がある】は、早産で生まれたことによる障害の不安と成長発達への期待、早産児を育児することへの不安であった。【退院が不安でもあり待ち遠しい】、【生きていだけでうれしい】、妊娠中に駄目かもしれないと悲嘆していたにもかかわらず現実に存在していることがありがたく、母親として何かしてあげたい、愛情を伝えたいと感じる認識であった。

退院後は、5 カテゴリーが抽出された。【成長発達や身体の異常について不安に思う】、【できるだけ泣かせないようにしたい】は、入院中に医療者に任せていたわが子の異常の発見や哺乳量や体重管理を自分がしなければならぬという認識や、育児に対する焦りと泣かせることへの後ろめたさであった。

【一緒に暮らせることがうれしい】、【成長を実感して安心する】、【想像していたよりも育

てやすい】は、時間や空間に制限なく自分のもとにわが子がいることが嬉しい、日々のかかりからわが子の成長だけでなく自分が母親としてわが子の成長に気づけていることを実感する、わが子の授乳間隔を育児書と比較しわが子の育児が楽という認識であった。

#### 2) 考察

##### ①NICU 入院中のわが子についての認識

【専門家でないと世話できない】や【成長発達に期待し、今後の障害について不安がある】という子どもを世話することや将来への不安は、橋本<sup>7)</sup>が早産した母親は早産した思いに深く傷つき、罪責感と将来の不安に打ちのめされて、赤ちゃんに向き合うことさえ困難な状況であると示唆していることと一致する。

そして【自分が出産した子どもという実感が湧かない】というわが子への不確かさは、木下<sup>8)</sup>が明らかにしている早産した母親のもつ子どもに関連する不確かさに一致する。

【この子の母親として母親らしいことをしたい】、【退院が不安でもあり待ち遠しい】という期待は、Klaus ら<sup>9)</sup>が早期分離した母親が期待していた温かい、母親らしい感情をなかなか経験できないと述べており、そのため母親らしいことをすることへの期待を思っていると考えられる。

【生きていだけでうれしい】という喜びは、Sommons ら<sup>1)</sup>が早産した母親が早産児を見せられたとき、恐怖や罪悪感のため希望は消されてしまうと述べている。そのため、わが子に対しての積極的な希望ではなく、最低限生きていだけでうれしいと感じていると考えられる。

以上のように、母親は早産したことに深く傷ついているため、わが子への罪悪感や将来への不安があり、未熟さに向き合えず、自分は専門家でないから世話できないと否定的に受け止めている一方、積極的な希望ではないがわが子が存在すること自体に嬉しさを感じていることが示唆された。

##### ②退院後約 1 か月時のわが子についての認識

【成長発達や身体の異常について不安に思う】、【できるだけ泣かせないようにしたい】という不安は、超低出生体重児の発達後に関しては正期産児に比べて精神遅滞や脳性麻痺の発生率が高く、また注意欠陥/多動性障害や学習障害の発生率も高い<sup>10)</sup>と言われているように、決して楽観視できないこともあり退院してからも継続して不安を感じていると考えられる。また、Klaus ら<sup>9)</sup>が未熟児の誕生の始まりが弱々しく不安定であればあるほど、両親はいつまでも子どもを、脆

弱な存在として考えると述べているように、退院後もわが子に対して入院中の児のはかなさを持ち続け、不安を感じていると考えられる。特に、不妊治療によって妊娠し早産した母親については、母親としての理想を追求するがゆえわが子の現実を受け入れ難い<sup>11)</sup>と述べられており、できるだけ泣かせないように、母親はわが子をいつでも機嫌よく過ごさせてあげたいという理想を抱くこともあり、そのためわが子の世話の難しさやわが子の成長発達の異常への不安を募らせることも考えられる。

【一緒に暮らせることがうれしい】という喜びは、Sommons ら<sup>1)</sup>が早産した母親が早産児を見せられたとき、恐怖や罪悪感のため希望は消されてしまうと述べている。そのため、わが子に対しての積極的な希望ではなく、入院中には最低限生きていくことだけでもうれしいと感じていたように、退院後には一緒に暮らせることがうれしいと感じていると考えられる。

【成長を実感して安心する】という思いは、山本ら<sup>12)</sup>がNICU入院中には親は子どもの反応を得る機会が乏しくなり、早産などにより心が傷ついている親は、面会ではできていても、子どもを観察し、反応を読み取る感受性が低下しており、さらに子どももCUEを明瞭に送ることが困難な状況であると述べている。そのため退院してからは母親の早産した傷つきが癒され、徐々にわが子のCUEも明瞭になることも伴い、わが子の反応に気づけるようになることから成長の実感につながっていると考えられる。さらに母親自身がわが子の成長を実感できることが母親としての自分の実感になっていると考えられる。特に不妊治療によって妊娠し早産した母親は、出産した実感にもかかわらず、わが子であることを実感できない矛盾を抱えている<sup>11)</sup>と述べられており、自分の家で自分なりの育児を開始することで子どもをわが子だと認識することや、わが子と2人の時間をゆつくりと制限なく過ごすことでわが子を実感することにつながると考えられる。

【想像していたよりも育てやすい】という育てやすさの認識は、和田<sup>13)</sup>が、搾乳期間が長くなるとストレスになっていると述べており、そのストレスから解放されたことが考えられる。特に、NICUは医療圏を超えての搬送や他県からの搬送により入院することも少なくはないため、遠くから面会に来ることも疲労を伴うため、その疲労から解放されたこともあり、育児を楽に感じていると考えられる。

以上のように、早産した母親は、退院後も児のはかなさを持ち続け、発達予後の不安を感じている一方、積極的な希望ではないがわが子と一緒に暮らせること自体や、入院中に

感じていたストレスからの解放に嬉しさを感じ、一緒に過ごすことでわが子の成長を実感し、さらに母親としての自分自身を実感していることが示唆された。母親は日々の育児への疲労や不安だけでなく、ようやく家庭で過ごせることやわが子として子どもの存在を実感している時期でもあることの視点を持ち、また不妊治療の経験がわが子についての認識に影響することも踏まえ、母親がどのような思いを抱きながら子どもと一緒に過ごしているかを細やかにアセスメントしていく必要があると考えられる。

#### 引用文献

- 1) Sammons W. A. H., Lewis J. M. 監訳 小林登 竹内徹:未熟児 その異なった出発, 医学書院, 1990
- 2) 上谷良行: 超低出生体重児の予後, 小児科診療 70(4). 549-553, 2007
- 3) 又吉國雄: 体外受精妊娠例の母性と育児, 周産期医学, 23(12). 1743-1746, 1993
- 4) Hjelmstedt A., Widstrom A-M., Wramsby H., et al: Emotional adaptation following successful in vitro fertilization, FERTILITY AND STERILITY, 81(5). 1254-1264, 2004
- 5) Gibson F. L., Ungerer J. A., Tennant C. C., et al: Parental adjustment and attitudes to parenting after in vitro fertilization, FERTILITY AND STERILITY, 73(3), 2000
- 6) 堀妙子: 低出生体重児の母親が退院前に感じる不安とそれに影響する要因について, 日本新生児看護学会講演集, 74-75, 2000
- 7) 橋本洋子: NICU ところのケア 家族のこころによりそって, メディカ出版, 2003
- 8) 木下千鶴: NICUにおけるファミリーセンタードケア, 日本新生児看護学会誌, 8(1). 59-67, 2001
- 9) Klaus M. H., Kennell J. H. 監訳 竹内徹, 柏木哲夫, 横尾京子: 親と子のきずな, 医学書院, 1985
- 10) 上谷良行: 超低出生体重児の予後, 小児科診療 70(4). 549-553. 2007.
- 11) 内山尚子: 不妊治療によって妊娠し早産した母親のわが子についての認識, 平成19年度千葉大学大学院看護学研究科修士論文.
- 12) 山本美佐子, 水島禮子: 早産の母親の母性アタッチメント形成に関する研究-初期の母親感情の変化-, 群馬県立医療短期大学紀要, 5巻. 43-54, 1998
- 13) 和田美恵, 小林博子: 早産児を出生した母親の児への思いと母乳育児への思い, 第38回看護学会 - 母性看護 -, 2007

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

発表者：三瀬尚子

題目：早産した母親のわが子についての認識

学会：千葉看護学会第16回学術集会

発表年月日：平成22年9月26日

発表場所：千葉大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三瀬 尚子 (NAOKO MISE)

千葉大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：40513940

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：